

西教寺慧海潮音

——江戸後期の学問的交流と功績——

興 津 香 織

一 はじめに

真宗本願寺派西教寺第八代住持、慧海潮音（一七八三—一八三六）は江戸後期を代表する学匠の一人であるが、大乘非仏説を主張した富永仲基（一七一五—一七四六）『出定後語』を破した『摺裂邪網編』二巻、及び服部天游（一七二四—一七六九）『赤裸々』を駁した『金剛索』一巻を著したことが知られてはいるものの、その功績の全容はまだ明らかになっていない。

西教寺には、慧海（及び歴代住持）の収集・書写した経典類や文書類、書簡等さまざまな遺物が残されている。本稿では、西教寺所蔵資料調査で明らかとなりつつある慧海の交流関係や功績を報告・検討することによって、江戸時代後期における江戸の学問拠点としての一例を提示したい。

二 西教寺及び慧海について

現在東京文京区にある涅槃山西教寺は、常州那珂郡村松にあつた村松行武が親鸞の弟子となり一字を建立したところから始まる。その後、寛永年間（一六二四—一六四四）に江戸開基釈了賢が江戸湯島三組町に一寺を建立した。元禄二年（一六八九）、二世誓玄の時代に現在地に移り、慧海が中興開山した。

慧海は天明三年に江戸四谷の酒屋に生まれ、後に西教寺の養子となる。第七代能化智洞（一七三六—一八〇四）に真宗学を、江戸寛永寺の慧澄（一七八〇—一八六二）に天台学を学ぶ。西教寺住職となりその傍ら儒学・神道を講究した。天保六年（一八三五）には五畿内を歴遊して内外の学匠と交流し漢詩文の贈答をした。その翌年正月一日、西教寺にて寂した。他の著作に『起信論義記筌諦』六巻、『金師子章放光記』一巻、『除疑蓋辨』、『佛足石歌考』一巻、『無用閑談』一巻、『入学策進』

并遺文』一卷、慧海の考案とされ現存数が限られ大変珍重されている「五趣生死輪図」及びその説明文『五趣生死輪縁由』（天保三年刊）がある。また慧海の詩文や文書には名所やその縁起類に関するものが見られ、畿内のみならず江戸近郊の様々な名所に出向いていた様子が窺える。

三 西教寺所蔵資料の概要

これまで西教寺所蔵資料は調査された事が無かったが、西教寺より調査を依頼された佐藤もな氏（帝京高等看護学院非常勤講師）と筆者の二名で昨年から調査を開始し、現在各文書の調書を取り目録を作成中である。仮番号をつけ、中性紙の封筒に一部ずつ保存している。二百点ほどの写本と二十点を超える版本がある。内容から仏教学的資料、歴史的資料、文学的資料、その他断簡の類に大別できる。大變価値が高く注目されるのは、唐代の懷感撰『釈浄土群疑論』第七卷の断簡、法華経断簡、大般若経断簡等の仏教学的資料、歴史的的な価値を有する豊臣秀次朱印状である。これらは慧海筆『西教寺古宝抄文書目録』（西教寺蔵）に見られ、西教寺の宝として認識されてきたことがわかる。以下、これら四つについて紹介しておきたい。

① 『釈浄土群疑論』第七卷断簡⁽¹⁾

一紙二十八行十七字（紙本墨書、縦二四・〇糎、横五一・七糎）。

識語が二つあり、一つはある鑑定家の、もう一つは慧海による文政七年（一八二四）のものである。慧海によると、「支那国浄土門諸師の章疏の多くは智證大師円珍が伝え、唐の懷感禪師の『釈浄土群疑論』もその一つである。吾が寺所蔵の『群疑論』を刊行本と比較すると、その字に差がある。智證大師が唐に在って伝写し将来したと伝えられている。鑑定家は書法と紙色は傳教大師に大いに近く、それを少し下った時代と言う。傳教大師は延暦二十三年（八〇四）に入唐し、二十四年に帰朝した。智證大師は仁寿三年（八五三）に入唐し、天安二年（八五八）に帰朝した。その時すでに（両者には）五十余年の隔りがある。鑑定家を信じてよい。」

慧海の比較した刊行本は不明であるが、写本の系統を検討したい。石塚晴通氏は、字体や料紙等から唐代の書写と判定されている。⁽²⁾

② 『法華経』断簡⁽³⁾

一紙八行（彩箋墨書、縦二・九糎、横一四・二糎）、薬草喩品の断簡。装飾に金の切箔が撒かれ金界が施されている。字体や紙色等より平安時代後期のものと考えられる。

③ 『大般若経』断簡⁽⁴⁾

一紙四行十七字（紙本墨書、縦二四・九糎、横七・五糎）。字体や紙色等から鎌倉時代のものと考えられる。

④ 豊臣秀次朱印状

裏の打紙に「秀吉公ノ御朱印」と墨書があり、豊臣秀吉の朱印状として保管されてきたようである。先の『西教寺古宝抄文書目録』にも「太閤御朱印」とある。しかし実際には秀吉の甥秀次の朱印状で、畿内周辺の寺社に宛てたものと思われる。

他にも智洞による書軸や和歌断簡、慧海が俱舍論を講じたことに対する霊如からの礼状等がある。

また膨大な文学的資料も注目に値する。慧海の作が約七十点と多数を占め、漢詩を得意としていたことが窺える。書家の中澤俊卿（中澤雪城一八〇八—一八六六）、仏教学者である荻野梅塙（一七八一—一八四三）、漢詩人の大沼竹溪（一七六二—一八二七）、枕山（一八一八—一八九一）など著名人の作も見られ、慧海の交流関係の一端を垣間見ることができるといえる。なお慧海後の時代には、鳥地黙雷（一八三八—一九一）らによる和歌の短冊が多数残されている。

四 交流関係

最も交流が深かったのは松平定常（一七六七—一八三三）（以下、冠山⁽⁵⁾）であろう。冠山の漢詩や慧海宛て書状が約十五点と他に比べて多いのである。

冠山は明和四年、旗本の子として江戸に生まれた。鳥取藩の西館主大隅守定得の養子となり、大名となった。文学の三

侯の一人である。享和元年（一八〇一）、三十五歳で病により隠居し冠山と号し、文化十年（一八一三）に剃髪。天保四年に六十七歳で没するまで江戸において学者や学僧、書家等と交流し、⁽⁷⁾地理、歴史、書誌、仏典等多岐にわたって研究し、著書数百巻といわれる。これまで慧海と冠山の関係は、冠山撰『江戸黄檗禅刹記』に慧海が序文を書いた点、⁽⁸⁾冠山撰『新刻法華経』で荻野梅塙とともに慧海が諸本の校訂を担当した点⁽⁹⁾以外は知られず、ほとんど注目されて来なかった。

また両者の交流関係が重なる人物として『江戸名所図会』の挿絵で有名な尾州家の御用絵師である長谷川雪旦（一七七八—一八四三）が挙げられる。京都の地誌『都名所図会』（秋里籬島著、安永九年（一七八〇）出版）に刺激を受けた斎藤長秋は編纂を開始したが寛政十一年（一七九九）に病死、莞斎が後を継ぎ長谷川雪旦に挿絵を依頼するも文化十五年（一八一八）に莞斎が死去、次の月岑が天保年間に刊行した。雪旦は享和元年（一八〇一）から莞斎・月岑の二代と付き合⁽¹⁰⁾いがあり、挿絵を依頼された。

他方、冠山は『江戸名所図会』に序文を書いている。幼少時から地理に関心を持ち、自身も『武蔵名所考』等の地誌を刊行し評価が高い。地理書の序文を頼まれることが多く、月岑が依頼した。⁽¹¹⁾『江戸名所図会』研究でこれまで知られていないのは、月岑と冠山との関係、また莞斎・月岑と雪旦との関

係であつて、冠山と雪且を結びつける要素は見出し得ない。

西教寺には慧海が天保六年（一八三五）に畿内に十ヶ月以上の大旅行をした際友人達から贈られた漢詩や和歌、自作の漢詩等を集めた卷子本（『西国見聞録』と仮称）が残されており、そこに雪且が絵を描いている。慧海は旅行中目にした吉野の桜と竜田の紅葉が旅から帰ってきて夢に出てくるので雪且に描いてもらったと記している。ここに雪且と慧海との関係を見出すことができ、慧海を通じての冠山と雪且の関係を西教寺の資料から探ってみることは、新たな視点からの検討方法として有用であるといえる。⁽¹²⁾

五 おわりに

以上、西教寺所蔵資料によつて、慧海を中心とした江戸後期の学問的交流の状況を示した。今回は西教寺の資料紹介と交流関係を提示するにとどめたが、作業終了後には、個々の資料に詳しくあたることにしたい。また歴史的資料や文学的資料についても、それぞれ専門的方面からの検討が待たれる。

- 1 断簡の該当箇所は大正蔵第四七卷七二頁上二二—中二三。
- 2 北海道大学名誉教授。氏は西教寺にて現物を見て判定された。
- 3 断簡の該当箇所は大正蔵第九卷一九頁下一五—二五。
- 4 断簡の該当箇所は大正蔵第五卷九六頁上一—五。
- 5 松平定常に関して小谷恵造『池田冠山傳』（三樹書房、

一九九〇年）を参照した。

6 大名の中で好学の誉れ高い毛利高標と市橋長昭と冠山の三人。なお市橋長昭の漢詩も西教寺に残されている。

7 小谷前掲書（九四頁—）には林述斎、松崎謙堂、市河寛齋・米庵、広瀬蒙齋、滝沢馬琴、西島蘭溪その他多数の碩儒との交遊が紹介されている。

8 『江戸黄檗禅利記』九卷は江戸にあった黄檗宗の二十八寺院について由来・寺宝等を文政十年に冠山がまとめたもの。木村得玄『校注 江戸黄檗禅利記』（春秋社、二〇〇九年）として校訂・出版されているが、慧海に関しての言及はほとんどない。

9 小谷前掲書（七六頁、八七—九三頁）。

10 齊藤智美「明治大学図書館所蔵「長谷川雪且書簡」とその背景について」（『図書』（五）、一六八—一七五頁、二〇〇一年）（一七二頁）。

11 小谷前掲書（六六頁—）。

12 齊藤智美前掲論文には氏が扱った長谷川雪且書簡は今まで知られておらず、他にもそういった書簡や絵、史料があるだろうと言われている。まさに西教寺の絵もその一つである。

付記…今回の調査にてご配慮賜りました西教寺ご住職村松賢英師並びに西教寺の皆様には厚く御礼申し上げます。

〈キーワード〉 江戸後期、慧海潮音、西教寺、松平定常、雪且
（國學院大學非常勤講師）